

はじめに

19歳で東京大学と慶應義塾大学医学部に合格したときに『週刊朝日』の記者の方が自宅に取材に来ました。なぜ東京大学を蹴ったかと聞かれました。「大きなお世話」だと思いましたが、『週刊朝日』の記者の方も仕事でわざわざ私の家まで来たのですから丁寧な質問に答えることにしました。

実は競争率40倍の慶應義塾大学医学部に受かる可能性は低いと思っていました。それに、もし受かっても母子家庭でお金に困っていたわが家では学費の高い私立の医学部に行くのは無理だと思っていました。入学試験に慣れるためだけに受けたのですが、正積兄が知り合いの医者何人かに相談してくれました。このとき初めて知ったのですが医学の世界では慶應義塾大学医学部は東京大学医学部と並ぶ名門だということでした。駿台予備学校の偏差値としてはこの当時の東京大学理科一類の合格偏差値が65、慶應義塾大学医学部の合格偏差値が74でした。私の駿台予備学校の偏差値が76でしたので、東京大学は大丈夫かなと思っていました。

正積兄は私に慶應義塾大学医学部に進学することを強く勧めましたが、学費の問題が解決しませんでした。入学時に半年分払えばいいということで、正積兄が子供さんたちの養育費を削って慶應義塾大学

医学部の初年度の費用を負担してくれました。

「入学してから後期以降の学費は自分でなんとかしろ」と正積兄は言いましたが、正直言つてまったく見当が付きませんでした。家庭教師でもするかな、と漠然と思つていましたが、この当時の慶應義塾大学医学部は家庭教師を原則として禁止していました。学業の妨げになるから、という理由でした。結果的にはいくつかの出版社の本の校正や、週刊誌の代筆、医学部の学生向けの参考書などを書いていました。文章を書いてみてわかったのですが、読む人が理解しやすい文章を書くことがいかに難しいかを実感しました。日記のように、自分さえわかればいい文章を書くのは簡単ですが、人に読んでもらう文章を書くことは、知的レベルや人生経験が異なる人々に読んでいただくために実に難しいのです。正直言つて、私も1日に4時間以上集中して文章を書くことは困難です。

話は戻りますが、『週刊朝日』の記者の方に「どうして東大を蹴つたのですか？」と質問されてどう答えていいかわかりませんでした。だって、第1志望は東京大学だったし、医者になりたかつたわけではありませんでしたから。結局「慶應義塾大学医学部は信濃町にあり、私が住んでいる東京都中野区から電車で15分と近いからです」と、適当なことを言いました。東京大学までは1時間以上かかりましたから。

その後、この週刊誌は『東大を蹴った男たち』というタイトルで発売されました。

私が面白いと思ったのは、『東大合格体験記』の記事に書いてあった『週刊朝日』の編集者のコメントでした。確か、次のような意味の文面でした。

「東大に合格した受験生の皆様、本当におめでとうございます。しかし、東大に受かったからどうだというのでしょうか。東大に受かるために失ったものがあることを忘れないでください。本当に大切なことは、人の気持ちが変わることです。東大に受かったからといって、くれぐれも傲慢にならないでください」

せっかく、東京大学に受かった受験生に水を差すような文面でしたがなかなかいいこと



ケシ

を書くなと思いました。

この本は受験の指南書ではありません。変わり者の経験談と思って読んでいただければ幸甚こっじんでございます。

なお、人の名前が出てきますがすべて仮名です。個人情報保護の時代ですので容赦ようしゃください。